

卷頭言

通過儀礼

日本リハビリテーション専門学校 近野 智子

最近、私の職場である専門学校では、臨床実習に出た学生から、ある日突然「何だかやる気がなくて、課題に手がつかない、実習に行きたくない」という電話が入ることが多くなった。他校でも同様の学生が増えているとの情報を耳にする。私たちは、感染力の強い新種のウイルスの仕業と冗談を飛ばしているが、その矢先に別の学生からも「やる気がでない」コールが入り、頭を抱える。これは、一体どうしたことだろう？それに、なぜか男子学生の感染が多い気がする。学生の個別の問題もあるが、何だか背後に大きなものを感じる。それが何なのかはよくわからないし、どのような対処が有効なのかも見当がつかない。教員や親がいくら励ましても、諭しても「やる気」は出ないまま、途中で実習リタイアに至る。

実習生とは、いわゆる見習いである。見習いの大工さんが、「何だか最近どうもやる気が出ない」とか、「体調が悪いので今日も現場に行けない」とか、「自信がないのでもう現場には行けません」と言い出したら、その場でクビである。じゃあ、来年やる気が出たら来てねなどと言う棟梁はいない。このようなことを平気で口にする実習生は、学生だからこそ許されると思っているはずだ（無意識かも知れないが）。実習に行っても「学生気分」とはこのことを言うのであろう。

作業療法士の職業人としての実際的な訓練は、臨床実習の場で行われるが、「実習に行かれる」「レポートを書かれる」という、させられ意識の強い実習学生が少なからずいると思う。学校ではいわゆる職業準備訓練を行っている（あいさつをする、遅刻をしない、「ほうれんそう」をきちんと行うよう指導するなど）のだが、果たして職業人としての自覚を持つための準備教育はできているのだろうか？もしこれが学校の場できちんと行えているとしたら、やる気のない学生や自分から実習を切り上げてしまう学生や遅刻と休みの多い学生は今より少ないはずである。「職業人としてのやる気の準備訓練」は学校教育の役割なのか？個人の資質の問題として片付けざるを得ないのか？学校での教育は可能なのか？その方法は？など疑問は尽きない。

臨床実習はイニシエーションである。学生から職業人へ移行するための重要な通過儀礼であると思う。どんなに優秀な人であっても、その立場に置かれる前から母親になったり、職業人になることはできない。学生としての自分と決別し、見習い作業療法士になるためには通過儀礼が必要である。文化人類学の知見によれば、通過儀礼とは、ある文化の成員が社会構造のある地位から別の地位に移る際の儀礼である。これらの儀礼は、分離と移行と再統合の期間によって特徴づけられる。移行の期間のあいだ、通過儀礼を受ける人々は境界（敷居）の位置にあり、役割や地位が曖昧であり、しばしば既に通過した人からの試練にさらされる。

学生としての地位を失った実習生が、学生としての自分に決別できない時、「何だかやる気が出ないんです」とか、「自信がないからやめようと思うんです」という、実習からの戦線離脱が起こるようと思える。このイニシエーションに耐える（身をゆだねる）力はどこから来るのだろうか？私は、自分の無力さを感じつつ、人間社会のありようからこの問題を考えることも大切なのではないかと考え始めている。

（文献）

E.A. シュルツ, R.H. ラヴェンダ（秋野晃司, 滝口直子, 吉田正紀訳）：文化人類学 I. 古今書院, 159-162. 1993.